

2012年(平成24年)7月19日(木曜日)

押し花のDNA分析

福島大

78年前の標本使い成功

絶滅種の起源解明期待

福島大共生システム理工学類は18日、県のレッドデータブックで絶滅種に指定されている「イワキアブラガヤ」(昭和9)年採取の「イワキアブラガヤ」の押し花標本のDNA分析に成功したと発表した。同大によると、これまで20〜30年前の押し花標本のDNA分析は困難とされてきたが、78年前に採取した標本のDNA分析は画期的。



DNA分析に成功した「イワキアブラガヤ」の押し花標本を手にする首藤さん

研究メンバーの一人、黒沢高秀准教授は「絶滅種の実態解明に今回の手法が役立つことが期待される」と未知の植物標本の起源解明への応用に期待を寄せる。黒沢准教授をはじめ、同大学院共生システム理工学研究所博士課程の首藤光太郎さん(前期1年)、同研究科の兼子伸吾特任助教の3人が共同研究した。

イワキアブラガヤは磐梯町で1925(大正14)年に採取され、33年に新種として発表された植物。39年に北会津郡で採取された標本を最後に現在まで確認されておらず、10数枚の押し花標本が現存するだけ。今

回は同大所蔵のイワキアブラガヤを分析した。同大によると、古い標本はDNAが劣化しているため、分析に必要な過程の「PCR増幅」に成功しないことが多かった。しかし、今回はPCR増幅できる短いDNA配列を新たに設計。この結果、DNAの分析に成功した。黒沢准教授らは今回得たDNA配列データを活用し、北米からの帰化植物であるとの説があるイワキアブラガヤの由来を解明する考え。